論 文

大雑把さと些末さのあいだ

—『アメリカの農夫の手紙』におけるアメリカ性の矛盾／矛盾のアメリカ性—

山 口 善 成

I．序

ヘクター・セント・ジョン・ド・クレヴクールの『アメリカの農夫の手紙』(J. Hector St. John de Crèvecœur, *Letters from an American Farmer* (1782)) は二つの点において、きわめて興味深い構成上の不調和を呈している。一つめの不調和は、その抽象性への志向と細部に対する強迫観念的な執着との間で発生する。例えば、おそらくこの本の中で一番よく読まれ知られているであろう第3章「アメリカ人とは何か」("What Is an American?") は、その名のとおり、アメリカ人の特質を抽出し、理論化しようとする試みである。その内容については後ほど詳しく検証するが、ここでひとまず注目しておきたいのは、このような抽象化・理論化の議論のすぐ後、続く第4章以降の記述に見られる極端な詳細さ、あるいはこう言ってよければ、些末さである。第4章から第8章まで続くナンタケット島やマーサズ・ヴィンヤードの自然環境や習俗についての記述、第9章のサウスキャロライナ州チャールズタウン（現チャールストン）における奴隷制の風景、第10章の蛇やハミングバードに関する自然誌的記述、第11章のジョン・バートラムの庭園への訪問記 —— これらはそれぞれに植民期のアメリカ社会を詳細に捉え、それ自身としては大変面白い。しかし、第3章で展開される「アメリカ人とは何か」という大局的な議論と比べると、あまりにも対象が微細にすぎ、全体的なバランスを欠いていると言わざるをえない（とりわけナンタケットとマーサズ・ヴィンヤードに関する箇所については、ほとんどの読者がその細かさ、些末さにうんざりするだろう)。もちろん、第3章でいったんアメリカ人の定義を一般化しておいて、それに続いて具体論を繰り広げていると見なしたり、あるいは細かい事実を積み上げることで結論を帰納しようとしていると言ったりすることも可能かもしれない。ただ、私にとってどうしても気になるのは、『アメリカの農夫の手紙』における抽象的な議論の部分と些末な細部にこだわる部分とのギャップの広さである。別の言い方をすれば、第3章は他と比べて、明らかに浮いているのだ。

もう一つの不調和は、この擬似書簡集の目的が「アメリカ人とは何か」「アメリカとは何か」を実体験から紹介するというものであるのにもかかわらず、最終的に筆者である農夫ジェイムズ／クレヴクールは「アメリカ人」になることに失敗していることである。アメリカの農夫ジェイムズは父親が開墾した農地を受け継ぎ、自作農としてつましく暮らしていた。そこに、イギリス人の友人F. B.氏からアメリカでの生活について詳しい情報を求める手紙が届く。第1章には、果たして自分のような知識の限られた農夫がメトロポリタンな紳士F. B. 氏の望みを満たすことができるかと自問する様子が描かれるが、土地に根ざした耕作者の率直なアメリカ観こそが要求されているものなのだと結論づけ、やがてジェイムズは手紙を書き始める。隣人の牧師が言うところの、生命力あふれる新大陸の土

壌が生んだ「アメリカの野生樹」(Crèvecœur, 19) をそのままさらけ出そうというわけである。こうして始まった書簡のやりとりだが、しかしそれは思わぬ結末を迎える。アメリカ独立戦争前夜に書かれたという設定の最後の手紙において、驚くべきことにジェイムズはこう悟るのだ、「自分はやっぱりイギリス人だ」と。彼は父から受け継ぎ、それまで生活してきたアメリカの土地に強い愛着を持ちながらも、どうしても本国イギリスに反抗し、独立しようという気にはなれないのである。イギリスが植民地に対して課す理不尽な要求や暴力には憤りながらも、彼は「アメリカ人」に自己同一できない。[1]

私の考えでは、おそらくここに挙げた二つの不調和は互いに密接に関係している。つまり、抽象性と些末さの不調和は、ジェイムズ／クレヴクールがアメリカ人になれなかった原因を暗に示唆しているのである。本論は、抽象性（ないしは、ものごとを大局的にとらえる視点）と些末さ（ないしは、微細な事柄に対する執着）をキーワードに『アメリカの農夫の手紙』を再読し、あらためて「アメリカ人とは何か」を問い直す試みである。この際、これら二つの要素がいかに「アメリカ性」に関わっているかを検証するために、比較の対象として同時代のテクストからトマス・ジェファソンの『ヴァージニア覚え書』(Thomas Jefferson, *Notes on the State of Virginia* (1785)) を、また「アメリカ性」に関する議論の参考としてアレクシス・ド・トクヴィルの『アメリカの民主主義』(Alexis de Tocqueville, *Democracy in America* (1835-40)) を随時取り上げることになるだろう。このようにクレヴクールのテクストを歴史的、思想的に文脈化することで、「アメリカ人」の特質に関する議論に新たな視点を導入することが、本論の最終的な目的である。

Ⅱ. "What Is an American?"

まずは何よりも『アメリカの農夫の手紙』において、アメリカないしアメリカ人がどのように捉えられているのかをおさえておかなければならない。『アメリカの農夫の手紙』、とりわけ第3章「アメリカ人とは何か」はアメリカの象徴性や国家アイデンティティについて議論する際の基本テクストとして、これまで何度となく取り上げられてきた。焦点の置き方によっていくぶんかのズレはあるものの、常に指摘されるのは、クレヴクールによるユートピア的アメリカ表象の反歴史性、ないし非歴史性である。[2] 彼によれば、新大陸に到着したヨーロッパ人は次第に旧大陸の古い慣習や伝統を捨て、新しい人間、すなわち「アメリカ人」として生まれ変わるのだという (Crèvecœur, 44)。ここで示される一種原型的なアメリカ人像はその後のアメリカン・ナショナリズムの発展に礎を提供し、また「ヨーロッパ *v.* アメリカ」、「過去 *v.* 未来」、「社会的因襲 *v.* 個人の自由」、「文明 *v.* 自然」といった対立概念が現代におけるクレヴクール研究の出発点になってきたことは言を俟たない。[3] 最近の成果で興味深いところでは、クレヴクールの自然誌的関心に着目し、このテクストを「人類が生んだ新しい種、すなわちアメリカ人」の標本化を試みるものだとして論ずる研究が出てきているが、これも前述したような枠組みを崩すものではない。[4] むしろ、アメリカを自然誌的標本収集の実践の場として強調することで、その反（非）歴史的特徴を浮き出させる結果となっている。本論はこれらの議論に異を唱えるものではないが、その一方でテクストにはっきりと書かれているのにもかかわらず、これまで必ずしも充分に論じられてこなかったアメリカ人像に焦点を当てたい。端的に言って、それは

アメリカ人の「視点」に関わる特徴である。

では、第3章「アメリカ人とは何か」をざっとおさらいしておこう。序論で指摘したとおり、詳細な事例記述であふれる本全体の中で、この章だけは主として問題の一般化、理論化を担う箇所である。そして結論を少しだけ先取りしておくならば、ここで導き出されるアメリカ人像は抽象性と具象性、あるいは大雑把さと些末さとを絶妙なバランスで併せ持つものとして定義されている。

クレヴクールによるアメリカ人の定義は大きく三つの点に絞ることができるだろう。一つめの定義は、「土地に根ざすこと」に関わるものである。アメリカでは「あらゆるものが人を再生へと向かわせる。新しい法、新しい生活様式、新しい社会システム。ここで彼らは人間らしい人間になるのだ。ヨーロッパでは、彼らは肥沃な土壌や恵みの雨を奪われた、元気のない草木のようなものだった。彼らは皆しおれ、貧困、飢え、戦さによってなぎ倒されていた。しかし今、新大陸への移植によって、他の草木と同じように根を張り、一斉に花開いたのだ。かつて彼らは本国において、貧困層として以外は人数に数えられていなかった。だが、この地で彼らは市民となったのだ」(Crèvecœur, 42-43)。クレヴクールはしばしば人を植物にたとえ、アメリカへの移住を草木の「移植（transplantation)」として描いている。もちろん、そこに含意されているのは新大陸での土地の所有である。旧世界では許されなかった土地を所有することによって、人々は新しいアイデンティティ、すなわちアメリカ人としてのアイデンティティを手に入れるというわけだ。クレヴクールのアメリカ論において、最も強調されているのはこの点である。彼はテクスト全体を通じて繰り返し、アメリカにおける土地の所有と耕作が持つ意味を強調している。

アメリカ人の二つめの定義は、一つめの「自作農＝アメリカ人」の定義から派生したもので、自分の所有する土地で耕作するがゆえに自己利益を追求することができること、とされている。アメリカでは「労働の報酬は、自らの仕事の進み具合と完全に一致する。労働は『自己利益』という自然の原則に基づいている。<中略>アメリカ人は新しい原理に従って行動する新しい人間だ。それゆえ彼は新しい考え方、新しい意見を持つ。不本意ながらも怠惰で、隷属的に依存し、困窮し、無益な労働につかされていた状態から、彼はまったく別の種類の労働へ、充分な生活の糧に報われる労働へと移行した。これがアメリカ人だ」(Crèvecœur, 44-45)。土地に根ざし、自己利益を追求する人々 ── これまでの二点をまとめるとアメリカ人はこう性格づけることができるだろう。

この性格づけは第3章の補遺とも言うべき「ヘブリディーズ諸島民アンドリューの物語」("History of Andrew, the Hebridean") において端的にドラマ化されている。物語はヘブリディーズ諸島から新たに移民としてやってきたアンドリューとその一家が、いかに技術を身につけ、土地を手にし、そしてアメリカ人になっていったかをたどる。まさにヨーロッパ人が新大陸でアメリカ人へと生まれかわってゆく様子がここに描かれていると言ってよいだろう。さらに物語の内容以上にここで注目したいのは、その異常なまでにこと細かな描写の仕方である。その詳細さは物語の最後、アンドリューが4年間で手に入れた総資産のチャート化というかたちで最もはっきりとあらわれることになる。

彼[アンドリュー]が4年間で自分と彼の息子たちの手で取得した資産の価値は以下の通り。

土地の改良と借地	225ドル
乳牛6頭（1頭あたり13ドル）	78ドル
繁殖適齢の牝馬2頭	50ドル
その他の家畜	100ドル
73ブッシェル升の小麦	66ドル
アンドリュー宛の手形	43ドル
貯蔵庫の豚肉と牛肉	28ドル
羊毛と亜麻	19ドル
鋤やその他農耕器具	31ドル
合計　（ペンシルベニア州貨幣で240ポンド）	640ドル (Crèvecœur, 82)

読者にとってみれば、「だからどうした」という情報でしかない。ただし、地に根ざすということは、現実的でdown-to-earthな事実の積み重ねにほかならない。そう考えれば、ここで土地に根ざし、自己利益を追求するアメリカ人の姿がきわめて細かく、些末なレベルから描かれているのはそれほど驚くべきことではない。それはちょうどウォールデン・ポンドのほとりで自給自足の実験生活を行ったヘンリー・デイヴィッド・ソローにとって、実際的な収支細目を著書の中に収録することが重要であったのと同じことである。

さらに、『アメリカの農夫の手紙』全体から見ても、農夫ジェイムズの土地に対する思い（そして自分の息子たちも立派な耕作者になってほしいという思い）や素朴な耕作者としてのジョン・バートラムのエピソード等に、このアメリカ人像ははっきりとあらわれている。さらに言うならば、「耕作者」のイメージは単にアメリカの陸地を開墾する人たちだけでなく、アメリカの海を耕すナンタケットの捕鯨漁業の人々にもあてはめられ（「もしこの地の人々が陸に畝間を作ることで知られていないとしても、彼らはより荒々しい海を耕す人々なのだ」(Crèvecœur, 87)）、ここまでくると「耕作者」はただ単に農民を意味するだけなく、アメリカ人の別名としてとらえたほうがよさそうである。そして、アメリカ人を耕作者にたとえるとき、クレヴクールは彼らの生活をひたすら微細に、詳細に説明しようとするのだ。

ところが、である。クレヴクールは同じ第3章において、もう一点、アメリカ人の特徴を指摘しているのだが、これが今まで見てきたものとは全く逆のアメリカ人像になっているのである。つまり、アメリカ人の「大雑把さ」に関する議論だ。これまでアメリカ人とは土地に根ざし、現実的かつ微細なことを一つ一つ堅実にこなす人々としてきたのにもかかわらず、それと同じ口で彼はアメリカ人とはきわめて大雑把な性格を持つ人々だと言ってしまう。これは一体どういうことなのだろうか。

まずはその例を見てみよう。クレヴクールは、初めてアメリカにやってきたヨーロッパ人にとって、まず最初に直面する「困難はこれほどまでに広大な風景をどのように見たらよいかということにある」という(Crèvecœur, 40)。そして、しばらくアメリカに滞在することによってヨーロッパ人は視野・視点に変化をこうむるのだ。「ヨーロッパ人は初めてここに到着したときには、視野も目的もきわめ

て限定的であるように思われる。しかし彼は突然尺度を変化させるのだ。200マイルというと、かつての彼なら非常に長い距離だと感じられたが、今ではほんのわずかなものでしかなくなる。<中略>こうしてヨーロッパ人はアメリカ人になるのだ」(Crèvecœur, 57)。言い換えるならば、ここで説明されているのは広範囲な風景を一挙に捉えるための視覚トレーニングである。アメリカに来た人々は皆このトレーニングを済ませ、アメリカ人になってゆく。それはアメリカ人であることの必要条件なのだ。あるいは、個々の特徴や細かな差異よりも、大局的な全体図を重視するパノラミックな視点こそはアメリカ的なものの見方だと言ってもよいだろう。

さらに、最後にもう一つのアメリカ的特質として挙げられる「宗教上の無関心」もこのような大局的なもののとらえ方の表れと見なすことができるだろう。クレヴクールはヨーロッパ人がアメリカ人になったときの指標として、アメリカにおいて「いかにキリスト教の宗派間の差異が摩耗してなくなり、やがていかに宗教的な中立状態が行き渡るようになるか」を挙げている(Crèvecœur, 48)。ヨーロッパでは各宗派はそれぞれ固有の違いを持っているが、アメリカではそのような些細な違いは問題にならず、すべて一つにひっくるめて「キリスト教」になる、というわけである。さらに、このような大雑把さは宗教面だけでなく、国別の出自の違いにもあてはまるという。「アメリカ人は宗教の場合と同様、国別の出自においてもすべて同化してしまう。彼らにあっては、イギリス人、フランス人、ヨーロッパ人という名目上の違いはすべて消えてなくなる。それはちょうどヨーロッパで厳格に実践されているキリスト教の諸形式がここでは滅びてしまっているのと同じだ。この効果はこの先さらに広範囲に広がってゆくだろう。これは奇妙な考えに思われるかもしれないが、まったく本当のことなのだ」(Crèvecœur, 48-49)。

第3章「アメリカ人とは何か」で提示されるアメリカ人は、地に根ざし、細かく現実的なことにこだわり、それと同時に大雑把で大局的なものの見方をする人々である。些末かつ大雑把 ── 簡単に言ってしまえば、きわめて矛盾した人々だとしてよい。果たして本当にアメリカ人とはこのような矛盾を内在させた人々なのか、もしそうならば、このことはアメリカ人のアイデンティティについてどのようなことを示唆しているだろうか。そして、このような矛盾に満ちたアメリカ人の定義はクレヴクールのテクストそのものについて、何を意味しているだろうか。次節では比較の対象として別の例を用いて、これらの問いを検証したい。まず取り上げるのはトクヴィルの『アメリカの民主主義』である。

Ⅲ. パノラミックな視点と細部への執着

前節の最後に触れた大局的で大雑把なもののとらえ方は、「抽象化」の視点と理解することができる。そして、この抽象作用をこそアメリカ的な性質の最たるものとして説明しているのが、アレクシス・ド・トクヴィルである。トクヴィルによれば、アメリカとは厳密な個人主義と全体に対する絶対的な信頼が奇跡的に共存している社会だという。民主主義社会では特別に権力や能力を持つ人がいなくなり、すべての人が皆似たような均一的な人間になってゆくため、人は特定の指導者グループの考えを信頼するのではなく、自分自身の判断力に頼らざるをえなくなる、トクヴィルはアメリカの個人

主義をそう説明している。しかし、この個人主義は見方を変えることで、一瞬のうちに全体に対する絶対的な信頼へと変化する。すなわち、皆が似ているということは、自分の考え方と他の人々の考え方が同じという意味で、よって世論と個人の意見はここで一致を見るわけである。そうであれば、自分自身への信頼は社会全体に対して信頼を置くのと同じであり、また逆に世論を信頼することは自分自身を信頼することと同じになる。つまり、トクヴィルにとってアメリカの個人主義における「個」とは、通常それが意味するような個別性や独自性ではなく、均一化された個体、全体の一部としてのユニットを意味する。逆説的ではあるが、アメリカにおいては個人主義を追求すればするほど「人は個を忘れ、種しか考えられなくなる」のだ（Tocqueville, 512)。個から全体へと一気に跳躍することができる社会、それがアメリカである。

このような社会においては、当然人々のものの考え方も個別性より全体的な統一性に価値を置くようになる。「人は統一性という考え方に取り憑かれ、それをあらゆるところに探し始めるようになる」(Tocqueville, 512)。統一性への志向とは一般論や抽象概念への志向であり、広く包括的な視点でものごとを捉えようとする行為である。

> 対照的に、民主主義国家に生きる人は身の回りに、多少の違いこそあれ、自分と似たような人々しか見いだせず、それゆえ彼は他の人々について考える際、いつも自分の考えを人類全体の考えと見なすほどまでに拡大敷衍する傾向にある。自分自身にあてはまる真実は常に同じようにすべての同胞たち、すべての人類にあてはまるように感じられるのだ。学問分野において一般論を適用することに多くの時間を費やし、それこそが彼の最大の関心事となると、この癖は他の分野にも持ち込まれるようになる。こうしてあらゆるところに共通の法則を発見し、数多くの物事を一つの公式に包摂し、一揃いの事例を単一の原因で説明しようとする欲望が人間の知性の熱烈かつ盲目的な情熱となる。(Tocqueville, 496)

アメリカに典型的な民主主義下の市民像は、細かいことはさて置き、広く包括的に全体の統一性を見ようとする視点に象徴されているのである。

もちろん、これと同時に、トクヴィルがアメリカの特質として「個人主義」を挙げていることも忘れてはならない。むしろ彼の議論をまとめると、個人主義と平等を極限まで追求することで抽象論の偏重が生まれる、ということになるだろう。やはり、ここで提示されるアメリカ人像にも個に対するこだわりと大局的なものの見方、あるいは些末さと大雑把さとが逆説的に混合していると言わざるをえない。

クレヴクールと同時代のテクストにも、同じ種類の矛盾を観察することができる。例えば、トマス・ジェファソンの『ヴァージニア覚え書』である。クレヴクールの『アメリカの農夫の手紙』とジェファソンの『ヴァージニア覚え書』は、どちらも「アメリカとは何か」を主たる問いとして共有しているだけでなく、その構成もおどろくほどよく似ている。つまり、『ヴァージニア覚え書』も大雑把と些末さを併せ持つテクストなのである。

ほとんど盛り上がりらしい盛り上がりのない『ヴァージニア覚え書』の中で、ポトマック川がブルー

リッジ山脈を通り抜ける様子を描いた一節は、唯一クライマクティックなシーンとして読者に記憶されていることだろう。この場面で特徴的なのは、高いところから下方に広がる風景を見下ろす、その視点である。「ポトマック川がブルーリッジ山脈を通り抜ける地点は、おそらく自然の中でもっとも素晴らしい光景の一つだ。高いところに立って見るとよい。右手にはシェナンドア川が、山の麓を100マイルに渡ってはけ口を求めて流れている。左手にはポトマックが同じく山脈を通り抜ける出口を求めて接近してくる。二つの川が合流する瞬間、それらは一緒になって山に向かって突進し、裂け目を作り、海へと向かって通り抜けてゆく」(Jefferson, 19)。そして、パノラミックな視点はやがてこの荒々しくサブライムな場面から、その後ろに広がる穏やかな背景へと移ってゆく。「二手に別れた山の裂け目から、かいま見えてくるのはなめらかな青い地平線のかけらである。無限に続く広々とした土地が、見るものをいわば轟々とした奔流の光景から裂け目を通り抜け、下方に広がる静謐へと誘う。ここに目はようやく落ち着き、そしてそちらの方向へと道が続いてゆくのが見える」(Jefferson, 19)。クレヴクールのアメリカ論においてアメリカ人の特質として定義されていた、広大な大地を一挙に捉える大局的な視点がここでも実践されている。そして、この大局的な視点が抽象的なもののとらえ方を意味していたことは先ほどから指摘しているとおりである。

このポトマック川とブルーリッジ山脈のシーンは非常に有名な一節で、『ヴァージニア覚え書』を代表するシーンだが、しかし本全体を通して読者が最も印象づけられるのは、おそらくその記述の病的なまでの詳細さ、もしくは些末さである。北アメリカの地形、動植物から人々の習俗や合衆国の政体にいたるまで、ジェファソンは集めたデータを可能な限りそこに収録しようとしている。先にクレヴクールがヘブリディーズ諸島から来た移民アンドリューの物語を、彼が4年間で稼いだ財産目録の表でしめくくっていたことに触れたが、ジェファソンの場合はそれよりももっと徹底的なデータの整頓と列挙にページ数が割かれている。そしておおよその読者は、そこに集められているのが重要な資料であることは認識しつつも、あまりにも細かく、些末に見えるそれらの情報にうんざりするのである。

さらに別の例を同時代テクストから抜き出すならば、ジェレミー・ベルナップの『ニューハンプシャー史』(*History of New Hampshire*) 全3巻を挙げてもよいだろう。この本は最初の2巻で植民当初から独立までのニューハンプシャー、および近隣地域(特にマサチューセッツとの関係)の物語を時系列順にたどり、そして本来であればここで終わってもよいようなところ、ベルナップはわざわざこんな副題を冠した第3巻を用意している。「州の地誌、およびその自然誌、産物、土地改良、現在の社会習俗や司法・行政についてのスケッチ」。第3巻に収められているのは、この副題に明示されているとおり、ニューハンプシャーの地理的な特徴、動植物、社会の構成などについて、オブセッションと言っていいほど細部にこだわったデータの列挙である。果たしてどのようなメンタリティーがベルナップにこのような第3巻を書かせたのだろうか。ニューハンプシャーの史的全体像を描くのに、なぜこのような些末なデータのリストを挿入しなければならなかったのだろうか。あるいは、ここまでの議論をふまえて言い換えるのならば、なぜアメリカを描こうとすると、大雑把さと些末さが混在した像になってしまうのだろうか。[5]

もう少し答えを出すのを先延ばしして、些末さと大雑把さの奇妙な混合をさらに観察してみよう。

というのも、それはアメリカ合衆国独立期のテクストだけに見られるものではなく、それ以降の時代にもしばしば散見され、何よりもアメリカン・ルネサンスのテクストに触れないわけにはいかないからである。最も象徴的なのは、もちろん、ラルフ・ウォルド・エマソン「自然」(Ralph Waldo Emerson, "Nature" (1836)) における「透明な眼球」である。神の視点にまで昇華したその眼球は大局的なものの見方を極限まで追求したものである一方、それと同時にエマソンの視線は日常的な一つひとつの「商品」("Commodity") の世界にも向けられている。同じようにウォルト・ホイットマンの『草の葉』(Walt Whitman, *Leaves of Grass* (1855)) に見られる、誇大で包括的な視点 ——

> ぼくが矛盾しているって？
> よろしい、それならぼくはたっぷり矛盾してやろう、
> (ぼくは大きくて、ぼくの中には限りなくたくさんのものが詰まっているのだ)
>
> (Whitman, 88)

と何でもない生活風景をカタログ化する手法 ——

> 澄みきったコントラルトが二階のオルガン席で歌っている、
> 大工が板の削り具合を調整している、荒削り用かんなの舌が激しくシュッシュと高鳴る、
> 結婚した子どもも未婚の子どもも感謝祭の夕食に馬車をつらねて戻ってくる、
> 舵手が舵輪の把手をつかみ、がっしりした腕で船を傾ける、
> 航海士が捕鯨ボートの中で気を引き締めて立っている、槍と銛の準備はできた、
> 鴨撃ちの猟師が静かに用心しながら大股で歩く、
> 教会の執事が両手を組み合わせ祭壇で叙任される、
> 紡績女工が大きな紡ぎ車のうなりに合わせてうしろへ退いたり前に出たり.... (Whitman, 41)

の混合も同根の現象と見てよい。また、山登りに出かけ頂からの風景を見渡しながら、ヘンリー・デイヴィッド・ソローはこんなことを言っている。

> 多くの人は、私が山に登ってきたというと、望遠鏡を持って行ったかと尋ねる。たしかに、望遠鏡でならより遠くまで、個々のものをよりはっきりと見ることができるだろう。よりたくさんの会計事務所を数えることができるだろう。しかし、このようなことは高い地点から見る風景の特別な美しさや壮大さとは関係のないことだ。特定の2、3のものを、まるで普段近くで見ているように見るために、私は山に登るのではない。近くに遠くに数限りなくある多様な事物が相互に関係し合い、それが一つの絵となる、そんな風景を見るために山に登るのだ。
>
> (Journal V: 378)

明らかにこれは、個々の特徴や細かい差異を捨象したうえで可能となるパノラミックで、大雑把なも

ののとらえ方である。しかし、このように述べているのがソローであるということ、小さく細かいことにこだわり抜きながらウォールデン・ポンドでの生活を描いたソローその人であるということを考慮すると、ここで彼が称えている大局的な視点をそのまま字義どおりに受け取ることには留保させざるをえない。やはり、ソローもこれまで見てきたような些末さと大雑把さの混合をそのテクストの中に受け継いでいると言ってよいだろう。[6]

さて、そろそろ答えを出しておきたい。なぜアメリカのテクストには大雑把さと些末さが混在しているのか。なぜアメリカを描こうとするとその相矛盾する両方の要素が混在してしまうのか。それはつまり、そのような大雑把さと些末さの混在こそがアメリカだからである。この意味において、クレヴクールが『アメリカの農夫の手紙』で描いたアメリカ人像はきわめて正確なものだったと言えるだろう。そして、皮肉なことにクレヴクールはいまだ独立さえしていないアメリカ人たちの特徴を克明に捉えることができたのにもかかわらず、彼自身はアメリカ人になれなかった。その理由は、彼が大雑把さと些末さの矛盾がもたらすアメリカ性を保持できなかったからにほかならない。実際、最終章「辺境生活者の憂鬱」("Distresses of a Frontier-Man") には大雑把さと些末さのバランスが破綻してしまっている様子が描かれている。

では、最後にまとめとしてこの最終章から、ジェイムズ／クレヴクールがアメリカ人になれなかった理由を推測することで本稿を終えたい。

Ⅳ. 結：伸縮自在のアメリカ性、あるいはジェイムズ／クレヴクールはなぜアメリカ人になれなかったのか

最終章「辺境生活者の憂鬱」における「憂鬱」とは、直接的には本国イギリス側と植民地側との間で板挟みにあい、どちらの側にもつくことができなくなっていることから生まれる憂鬱である。序論で触れたように、この最終章においてジェイムズははっきりと自分はこれまでどおり「イギリス人」であることを意識している。しかし、その本国イギリスは自分たちアメリカに住むものたちへの攻撃をやめず、さらに植民地側に付かなければ、これまでよき隣人であった人々が自分を敵として認定し、やはり攻撃してくる。どちらの側にも積極的につくことができず、ジェイムズの憂鬱が生まれるのである。そして彼は利害関係にまみれた白人社会にうんざりし、先住民の村へとさらなる移住をはかるわけである。

ただし、ジェイムズが置かれている板挟みは、本国と植民地との間のそれだけではない。それは、これまで例を挙げて説明してきたアメリカ的特質が抱える矛盾、大雑把なもののとらえ方と些末なものごとに対するこだわりの間で生じる板挟みでもあるのだ。最終章にいたってジェイムズは次第に大局的な議論ないし抽象論に対するいらだちを見せ、やがてはそれを捨て去ることになる。物語は彼が白人社会を去り、先住民の村を選ぶという結末で終わっているが、その決断は抽象論をあきらめ、現実的でdown-to-earthな日常に生きようとする選択と理解することができるのである。

ジェイムズの抽象論に対するいらだちは以下の一節にもっともよくあらわれている。

落ち着き払ってよそよそしい見物人は、安全な場所から私を恩知らずだと非難するだろう。そして、ソロンやモンテスキューの原理を持ち出してくるかもしれない。彼は私をわがままで有罪だと見なすだろう。私を侮辱的なことばでののしるだろう。身の危険にさらされていない彼の熱っぽい想像力は、すこしも不安に心乱されることなく、この大問題について気ままに長々と論ずるだろう。この広い戦場を攻撃と防御が交互にあらわれる場面としてしか考えないだろう。彼にとって、問題は抽象化されているのだ。安全防壁越しに遠くから爆炎を眺めていても、悲喜こもごもの感情に直接影響を受けていないのであれば、どのような意見もものごとを一面的にしかとらえることはできない。(Crèvecœur, 193)

そしてジェイムズはそのような遠くの安全な場所で抽象論をあれこれふりまわす人々に対し、こう言う。まずはこの場所に来て少しの間だけでも我々と一緒に暮らしてみろ、そして我々の毎日の労働、不安や恐怖を共有してみろ、と。「ああ、彼が私と同じ立場に置かれたなら、彼の家が私の家と同じようにたえずみじめな犠牲者たちで満たされたのなら。戦火やナイフから命からがら逃れのび、震えあがるような野蛮な行為や殺人を目にしてきた犠牲者たちのことだ。そのような状況に置かれれば、彼はきっとあらゆる政治的な省察を一時中止し、あらゆる抽象的な考えを捨て去るだろう」(Crèvecœur, 194)。

これに対して、ジェイムズが選んだ先住民インディアンの生活は、そのような抽象的な議論のない、素朴な生活様式が実践されている場所である。彼はインディアンを「法による統治は行われていないけれど、汚れていないシンプルなやり方の中に法が与えうるすべてのものを見いだした人々」と説明する(Crèvecœur, 199)。そして、彼らの中にまじって彼がしたいことというのは、相も変わらず地に根ざして「耕作」することなのである。上から見下ろして抽象的なことを論ずることにうんざりし、down-to-earthに生きるための選択が、インディアンの村に移住することだったわけである。

しかし、この選択こそは、ジェイムズが結局はアメリカ人になることができなかったことを如実に示している。これまで述べてきたように、アメリカ人とは大雑把さと些末さをまったく同時に持つことが出来る人たちだった。あるいは、些末なことをとことんまで追求することで、一気に抽象論へと超越することができる人々、と言ってもいいかもしれない。最後にもう一度トクヴィルを引用してみよう。彼はアメリカの特質として、両極端の間を一気に行ったり来たりすることができる人々、両極端の間がない人々としている。

民主主義社会において、それぞれの市民は普段は非常にささいなこと、つまり自分自身のことに気を取られている。もし彼が目を上げれば、そこに見えるのは一つの巨大なイメージ、つまり社会のイメージ、もしくはそれよりもさらに大きな人類全体の姿である。彼はきわめて個別できわめてはっきりとした概念か、あるいはきわめて一般的できわめてあいまいな考えのどちらかを持つ。その間には何もない。(Tocqueville, 561)

きわめて些末なことからきわめて抽象的な概念との間で瞬時に行き来できること、この非常に特異な

跳躍力。トクヴィルは別の箇所で、このミクロとマクロを自由自在に行ったり来たりできる視点を「神の視点」と言っている（Tocqueville, 833)。エマソンの「透明な眼球」に象徴されているように、何の特徴もない「普通の人」が神との合一さえ果たしてしまう場所、それがアメリカである。ジェイムズに欠けていたのは、この自分の身の回りの些事から一気に世界を見下ろす高見の視点へと昇る跳躍力だったのである。

そして、もちろんこれは著者であるクレヴクールに欠けていた能力でもあった。D. H. ロレンスはその『古典アメリカ文学研究』（D. H. Lawrence, *Studies in Classic American Literature* (1923)）において、実際にはクレヴクールが先住民インディアンの集落に行かず、独立戦争が始まった途端に農場も家族も皆捨てて故国のフランスに逃げ帰ったことを非難している。ロレンスにとって、なんのかんの言ってクレヴクールの正体は「かかとの高い靴をはき、刺繍の入ったベストを身にまとった文人」で、土地の臭いが染みついた農夫ではないと映ったようである（Lawrence, 35)。『アメリカの農夫の手紙』は結局、サロン・インテレクチュアルの「理想主義」、「絵空事」でしかない、と（Lawrence, 36)。ロレンスの解釈を採用するならば、クレヴクールは彼の描く農夫像とは逆の方向に、つまり地に足のついた現実的な些事よりも抽象的な理想論のほうに傾斜していたと言えるかもしれない。ただ、これまでの議論から明らかなように、いずれにしても同じことである。クレヴクールも、そのペルソナである農夫ジェイムズもアメリカ人になれなかった。その理由は二人とも、大雑把さと些末さを一度に保持し、その両極端を自由に行き来する能力を持つことができなかったからなのだ。[7]

注

1　『アメリカの農夫の手紙』冒頭のユートピア的アメリカ像と最終章のペシミズムとの間に不一致や分裂を指摘する先行研究は数多い。これまでそのような不一致や分裂がいかに解釈されてきたかを踏まえた上で、David M. Robinsonはクレヴクールの別のテクスト（*Sketches of Eighteen-Century America*）を手がかりに再考している。Robinson, "Community and Utopia in Crèvecoeur's *Sketches*" *American Literature* 62: 1 (March 1990): 17-31.

2　例えば、マイラ・ジェーレンは『アメリカの農夫の手紙』に旧世界の歴史、伝統、因襲に対するアンチテーゼだけでなく、歴史そのものからの脱却を見いだしている。言い換えるなら、それはクレヴクールのテクストにおける反歴史性だけでなく、非歴史性に関する指摘である。Myra Jehlen, "Multitudes and Multicultures" in Hans Löfgren and Alan Shima, eds., *After Consensus: Critical Challenge and Social Change in America* (Göteborg, Sweden: Acta Universitatis Gothoburgensis, 1998): 155-69.

ジェーレンはさらに独立期から19世紀中葉にかけて出版されたその他のアメリカン・テクストについても、同じような非歴史性の刻印があると論じる。とりわけ彼女によるアメリカン・ルネサンスの作家たちの分析は非常に興味深く、本論考を準備するにあたっても大いに刺激になった。Jehlen, *American Incarnation: The Individual, the Nation, and the Continent* (Cambridge:

Harvard UP, 1986)

3　『アメリカの農夫の手紙』をアメリカン・ナショナリズムの最初期の発露としてとらえる解釈は現代にいたるまであらゆるクレヴクール研究に共通しているが、最近では、クレヴクールの描くアメリカン・セルフを特定のコンテクストからより厳密に分析しようとする論考が出てきている。例えばジェンダー論の立場から、土地所有による（男性的）自己実現と（女性的）「感情」のディスコースの葛藤をクレヴクールのアメリカ人論に見るEvan Carton, "What Feels an American?: Evident Selves and Alienable Emotions in the New Man's World," in Milette Shamir and Jennifer Travis, eds., *Boys Don't Cry?: Rethinking Narrative of Masculinity and Emotion in the U. S.* (New York: Columbia UP, 2002): 23-43. また、独立期におけるアメリカ北東部と南部との地域的格差に着目し、クレヴクールの「アメリカ人」はヨーロッパ的な価値観と対比関係にあるだけでなく、内的「他者」としての南部とも差異化されているとする Jennifer Rae Greeson, "Colonial Planter to American Farmer: South, Nation, and Decolonization in Crèvecoeur," in Malini Johar Schueller and Edward Watts, eds., *Messy Beginnings: Postcoloniality and Early American Studies* (New Brunswick, NJ: Rutgers UP, 2003): 103-20も大変興味深い。

4　Pamela Regis, *Describing Early America: Bartram, Jefferson, Crèvecœur and the Influence of Natural History* (Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1992): 107.

5　ベルナップの歴史記述に関する分析は、彼の歴史小説 *The Foresters* (1792年出版。アメリカ史の登場人物をすべて森の住人として描いた歴史寓話）との関連から、2008年10月に開催された日本アメリカ文学会全国大会（於西南学院大学）において、「自然誌から国家史へ：Jeremy Belknap, *The Foresters*における『歴史』の生成」と題して口頭発表した。この論考は加筆修正を経て、近日中に学会誌に投稿する予定である。

6　文学以外の方面においても同じことが指摘できる。すなわち、ハドソンリバー派に代表されるようなパノラミックな視点を最大限に活用した風景画ジャンルである。近日中に出版予定の雑誌論文 Yoshinari Yamaguchi, "The Panoramic Point of View and Visual Training for Americans: 'Bird's-Eye View' Stories of Two Travelers" *Review of American Literature* 21 (March 2009) において、この点について簡単に触れているので参照されたい。また、フランシス・パークマン（Francis Parkman）の歴史記述に関する仕上げの論考として現在執筆しているエッセイではこの問題についてより詳しく論じている。こちらも2009年度中に学会誌で発表予定。

7　今日のアメリカ社会に同じ種類の大雑把さと些末さの混合を探すとすれば、その表れの一端は、例えば大統領選の党大会やスーパーボウルのようなイベント、あるいはそこまで大きくなくてもちょっとした公式行事など、公にアメリカ人の集団が形成される場に見つけることができる。そのような場では必ず国歌や"God Bless America"が斉唱され、そこに集まった人々は一様に胸に手をあて、斜め上方どこか遠くの方に目をやる。あの有無を言わせぬ一体感はおそらく日本人が持たない種類の一体感である。その一方で、アメリカは家柄や生まれ持った特権ではなく、個人のたゆまぬ努力を評価する個人主義の国であるとされている（少なくとも表向きは)。「アメリカ」という概念のも

とに生まれる一体感、そして個人の自由の尊重 ── 最終的には、大雑把さと些末さの問題はここに帰結する。連邦制確立の時代から現代にいたるまで、それは常にアメリカ民主主義の主旋律として響いている。

参考文献

Carton, Evan. "What Feels an American?: Evident Selves and Alienable Emotions in the New Man's World." *Boys Don't Cry?: Rethinking Narrative of Masculinity and Emotion in the U. S.* Eds. Milette Shamir and Jennifer Travis. New York: Columbia UP, 2002. 23-43.

Crèvecœur, J. Hector St. John de. *Letters from an American Farmer.* 1782; Oxford: Oxford UP, 1997.

Emerson, Ralph Waldo. *The Essential Writings of Ralph Waldo Emerson.* New York: Modern Library, 2000.

Greeson, Jennifer Rae. "Colonial Planter to American Farmer: South, Nation, and Decolonization in Crèvecoeur." Eds. Malini Johar Schueller and Edward Watts. *Messy Beginnings: Postcoloniality and Early American Studies.* New Brunswick, NJ: Rutgers UP, 2003. 103-20

Jefferson, Thomas. *Notes on the State of Virginia.* 1785; Chapel Hill: U of North Carolina P, 1982.

Jehlen, Myra. *American Incarnation: The Individual, the Nation, and the Continent.* Cambridge: Harvard UP, 1986,

---. "Multitudes and Multicultures." *After Consensus: Critical Challenge and Social Change in America.* Eds. Hans Löfgren and Alan Shima. Göteborg, Sweden: Acta Universitatis Gothoburgensis, 1998. 155-69.

Lawrence, D. H. *Studies in Classic American Literature.* 1923; London: Penguin Books, 1977.

Regis, Pamela. *Describing Early America: Bartram, Jefferson, Crèvecur and the Influence of Natural History.* Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1992.

Robinson, David M. "Community and Utopia in Crèvecoeur's *Sketches.*" *American Literature* 62: 1 (March 1990): 17-31.

Thoreau, Henry David. *Journal Volume 5: 1852-1853.* Princeton: Princeton UP, 1997.

Tocqueville, Alexis de. *Democracy in America.* 1835-40; New York: The Library of America, 2004.

Whitman, Walt. *Leaves of Grass.* New York: W. W. Norton, 1973.

（やまぐち　よしなり・本学准教授）